



04 鳥籠の彼女

囹圄でる編3

その日の行為を終え布団の上に横になる男女。

男が少女の体を抱き寄せながら口を開いた。

「そうだ、明日てあちゃんの住んでたお屋敷に行こう」

男の唐突な提案にてるは体を固くする。

「……」

——とうとうこの日がやってきた。

いつか永遠亭を訪れる日が来ることはおぼろげに思い浮かべていた。

しかし、いざ直面してみるとどう反応すべきかわからない。

みんなに会える喜び。不安。——恐怖。

無理やりとはいえ勝手に居なくなつた自分を、屋敷の皆はどう思っているのだろうか。

「大丈夫だよてあちゃん。きつと祝福してくれる」

男が耳元で囁く。ぞわり、と刺激が身体中を駆け巡り足先から抜けてゆく。

やがてまた恐怖心が首をもたげ、胸の奥を支配する。

火照る身体と浅いまどろみの中で、てるの意識はゆつくりと沈んでいった。

翌朝。

首輪によつて繋がれた状態でてるは男の後ろを歩いていく。

「お屋敷に行こうとは言つたものの、場所がわからないからさ、竹林からはてあちゃん案内してね」

久しぶりに感じる外の空気。

静かな森の中を男が連れて歩く。

しかし数分歩いたところでは歩みを止めた。

首輪の鎖がピンと張りつめる。

「どうしたの？」

「……行けない」

足がすくむ。みんなに会える。怖い。嬉しい。不安。怖い——怖い。

「そつか。いいよ」

男は懐から小刀を取り出すと手近な木の幹に印をつけた。

「今日はここまで。次はここより先に進めるようにしましょうね」

男が少女を抱き寄せる。まるで抵抗することなく男の腕の内に収まるてる。

「ここまで来たこと、忘れないでね」

男の指先がてるの秘所に触れる。

そこはじつとりと湿り気を帯びていた。

屋外に
出るようになって
数週間

チン
チン

イキキキキキ

ねーねー
ておちゃん
お屋敷に着いたらさ
まず何て挨拶しようね？



あー
この人を永遠亭へ
案内している

でも永遠亭へ
着いてしまつたら
どうなるのだろうか

どんな顔をして
みんなに会えば
いいのだろうか



そんな思いが巡ると
足が止まってしまふ

……ッ

ピーン

ザリッ

ちんちん



……
あー今日は
ここまでか

まあでも
この前より
結構進んだね

さあておちゃん
こつちに来て
この木に手をつけて

ザリッ

ザリッ



まるでこの場所を
記憶に焼き付ける
みたいにか

あ
いっ

ア
ン
ニ
シ
ト
キ
...

グ
グ
グ

ん
ん
ん

執拗に……



そして足が止まると
その場でわたしは
犯されることになる

ぞろぞろ

や
あ

あ

まだ心の準備が
できてないんだよね
仕方ないよね

二人でゆっくり
進んでいこう？

た
ん

ぞろぞろ



もうこんな
濡らしちゃって

もしかして
期待してた？

そんなこと
……ッ！

ほんのり……



ああ ごめんごめん
その体勢じゃ
手疲れちゃうよね

これで疲れないし
思う存分一つに
なれるね!

やッ……あ!
深すぎ……ッ
奥まで入って……



ほら
今日の一発目だよ!
しっかり受け取って!

この人の熱いのが
奥に当たって……
頭が真っ白になる

モウ、モウ



ああ……
いいよ……
てみちゃん
気持ちいいよ

それなのに
名前を呼ばれる度に
愛おしさが
こみ上げてくる

大切なところを
乱暴にかき回されて
めちやくちやにされて

さあてみちゃんも
一緒にイこ!

この人の声と
気持ちいいって記憶が
繋がって
もう身体に
しみ込んでるんだ……





ほらてるちゃん
恥ずかしくて
こっちにおいで

でもこんな開けた
場所...誰かが
通ったら...



おっぱいの
あたりとか...

ふん!!

ん!!

ん!!



ふとももの
あたりにも
念入りにね

ふん!!

ん!!

はなはな!!

せちせち



さあてるちゃん
いっぱい
汗かいたからね

ここで
流していこうか



大丈夫だって
こんな森の中
そうそう他人には
会わないよ

カチッ



でも...

ん!!

ん!!



このままじゃ
いけないな……
もう一回
ふたをしてあげよう

おや？
ここがまた
いっばい汗
かき始めちゃったね

熱いのが
お尻に当たって……
これまた
わたしの
中に……

びしょ
びしょ
びしょ
びしょ
びしょ

びしょ



ふふっ
もしかしたら
誰かに
見られてる
かもしれないね

や……
あッ！

あつ……ッ
かき分けて……
入ってくる……！

声出したら本当に
見つかっちゃう
かもよ？

そんな……
あなたが……
くうッ……

びしょ
びしょ
びしょ
びしょ
びしょ

びしょ

びしょ



僕のこんな可愛いお嫁さんを!

はあはあ! 僕はね! 見せびらかしてやりたいんだ!

やめて……これ以上その声を聞かせないで

わたしの心を塗り替えないで……



いつか絶対永遠亭に行こう! てみちゃん!

このままじゃ本当にみんなと会う頃には……

グッ

グッ

グッ



いきすぎて
頭おかしく
なっちゃう……

気持ちいの
引かないの
イまくのが
止まらない





セキ

視界が...
ぼやぼやする
あ...
手...
あたたかい...

今日はいっぱい
頑張ったね

てみるちゃん
大丈夫？

.....えっ？

.....あっ

ギンギン！

あ...
だめっ！
あ...
あ...
あ...

あと一回
だけだからさ

あ...
待って...
今日は...
もう...

てみるちゃん
抱っこしたら
柔らかくてさ...

バニバニ

後書

ここまでご覧いただきありがとうございます。
しろくろうさのスギユウと申します。

今回はちよつと試しにSS付きイラストを6枚、この後に載せています。
小悪魔てみちゃんと普段ヘタレな男の話。
こっちの話は鳥籠の彼女本編とは別の話になります。
……もしかしたらこんな世界もあったかもしれない
パラレルワールド的な感じでお楽しみください。

このシリーズも4冊目になり、少しずつキャラクターの置かれる状況が変わってきました。
てみちゃんの話はどう完結させるか一応決めてはいます。
ケロちゃん側も次にどうするかは決めてますが、
終わりまでには不透明。
せつかくだからてみちゃん側と何かしらの繋がりを
持たせたいですね。

文末ではございますが、本の感想等ありがとうございます。
励みになります。今後とも何卒、宜しく願いいたします。

奥付

原作：上海アリス幻楽団 様
印刷：プリントネット 様

発行：しろくろうさ
責任：スギユウ
発行日：2015/08/14

連絡先：yuu_819_as@hotmail.com
ブログ：<http://shirokurousa.blog.fc2.com/>
twitter：sugiyuu
pixivID：97799

「ねーねー 今日は何の日か知ってる？」
「うわあっ！何て格好してんだ！着ろ！服を着ろ！」
こいつはいつの間にか俺の部屋に住みついた妖怪兎の
因幡てゐる。自称幸運をもたらす。幸せ兎らしいが……
俺からしたら小悪魔でしかない。幸せ兎らしいが……
好き放題しやがって。俺が女性への耐性が無いのいいことに、
やしてやるけど、こいつは襲われないのがわかってて
やがる。



「今日はねー五月六日なんだよ」
それがどうした。
「五月六日。ゴムの日」
「ゴム？」
俺が頭に「？」マークを
浮かべていると不敵な笑みを
たたえながら
「そう。ゴム。まああんたには
このゴムなんて無縁だろう
からね！わからなくても
仕方ないか！」
こういふことを言うてくるやつだ。

「ほらほら女の子とエッチする時に
使うんだよー。なんならわたししが
使う方、教えてあげようか？」
「うぐぐ……」
目の前に、布一枚を挟んで、
女の子の、大切なものが……。
いかん頭がくらくらする。強烈な
女の子の香りが鼻を突いて理性の
タガが外れそうだ……。
「できないよねー。あんたみたいな
へタレじゃ一生縁が無いよねー」

この状況と、普段の鬱憤と。
こいつへの思いとかそういうのがいろいろ
噴出して、俺は自分が抑えられなかった。
「いい加減にしろこの雌ウサギ！」



「ひあっ！」
てゐが啜えていたゴムを落とす。
「もう堪忍ならん！」
「ちよっ、ちよっと待って！」
そう言っ慌てる彼女を
逃がすまいと俺は太ももを掴み、
ぐいっとなぐりつけた。

柔らかい。馬乗りになれた時から
思ってたけど……女の子の身体って
こんなに気持ちいいのか。
もっと触りたい。我慢できない。
「元はと言えばお前が先に誘って
きたんだからな」
「えっ？えっ……？」
「挿れるよ」

「やっ……だめっ……入る……
ほんとに入っちゃう……！」
「くうっ……」

案外すんなり入ってくれてよかった……けど、すごい締め付けで気を抜くとすぐにイってしまいそうになる。てるの膣内は俺の肉棒を弄ぶようにうねり動き、まるで吸いたてるように締めつける。彼女の震えと脈動が結合部から伝わってくる。向かい合わせの彼女の頬を一筋の涙が流れるのを見て胸がちくりと痛んだ。



汚れないように彼女の服を脱がし
なおも腰を動かし続ける。
「やあっ! 激しっ!... すぎい!... つ!」
思い遣りたい気持ちと焦りが滅茶苦茶に
なあって、自分でも制御ができない。
「もう少しで終わるから。我慢して」

俺は彼女の中に熱い進りを
吐き出した。
「んああっ! イ... つくう... つ!」
彼女の狭い膣では受けきれず、
白濁が溢れる。それは川となって
太ももを伝い、布団に大きなシミを
作った。
「はあ... つ、あ...」
「はあっ... はあっ...」

横になってしばらくの沈黙の後、
背中から細かい声が聞こえた。
「……ばか」
「……無理やりだったね。ごめん」
「違う。そうじゃないの」
背中^に何か温かい感触^がする。
吐息^が等間隔^で吹きかけられて
くすぐつたい。
「それって……」
「無理やりじゃないよ。急でびっくり
したけど……嫌じゃなかったよ」

振り向くとてゐるは微かな笑みを
浮かべていた。
いつもの企むような顔ではなく、
見た目の少女らしい純粋な笑顔。

てゐるは小指を立ててこちらに
差し出した。
「責任！」
「え？」
「とつてよね！責任！」
「ええ！……」
そこまで言つて、二人で笑い
合う。差し出されたままの
小指に自分の指を絡めて強く
握つた。
「幸せにしてね」
「そうだな。約束だ」
固く結んだまま離さない。
「まあ、お前さんの幸運の力が
あれば大丈夫だろう」
「何よ。わたし頼り？しょうが
ないなあ……」
溜め息を一つ漏らすと、
彼女は腹に一物抱えた悪い
笑みを顔に貼り付けながら、
そう言つた。





Toho Project Fanbook
『鳥籠の彼女04 囚番てゐ編3』
2015/08/14 しろくろうさ